

## 世界と身体 — ベルクソンの身体論を中心に —

提題者 安藤恵崇(高知大学)

身体に関する哲学的探求は、単に身体そのものの構造にとどまらず、常に「世界」の中における「人間」の存在を問い直すという性格を持っている。ベルクソンは、二作目の著作『物質と記憶』において、物質と精神の問題を、同時的全宇宙と時間的全過去としての世界があらかじめ与えられ、そこから「行動の中心」である身体が行動へと向かう必要性によって限定されて我々の世界が生起するという見地が表明されている。そしてこの問題は1906年の『創造的進化』において生命の進化過程に身体がおかれ宇宙論的な次元で問われていくことになる。

一方、西田は後期の「絶対弁証法」によって「世界」から「個物」へとという方向を提示し、意識からの出発に生じる難点を根本的に回避する試みの中で、「歴史的な身体」という語をもって、絶対的に矛盾し合うものが結び合わされる現実性の先端として人間の身体を提示する。純粋経験の哲学以来、ベルクソンへの共感を示した西田は、ベルクソンへの批判を宿すようになり、この時期には根本的な批判を向けるようになる。その根本的な一要因には、西田が従来の弁証法を批判しながらも、より根本的に「時間」と「空間」、「多」と「一」とを弁証法的に対立させるのに対し、ベルクソンは弁証法的総合という定式化を意識的に避け、二つの相対立するものの生起をそれらを表象する人間知性の本質に求め、西田の方向からすれば無媒介的に直接性のなかへ解消してしまう点があるだろう。

しかし、この二人の哲学者を彼らの一貫した問題意識からみるならば、それまでの唯物論と唯心論、実在論と観念論といった西洋哲学史において調停不可能となっている諸学説が、むしろそれらの立場の不徹底において対立を引き起こしていると考え、それぞれの仕方で自らの立場を深化し対立の地平を超えることで射程を拡大していったという基本的方向性は最後まで共有しているのではないだろうか。ベルクソンは本人も認めているようにデカルト以来の二元論の困難を完全に解消するには至らなかったが、「行動の中心」としての身体を介在させ、問題をいわば行動の関数として捉え直すことで対立している諸学説の二項対立を解消しようと試みた。身体は単なる感覚を有する物体としてではなく、一見必然性が支配している物質の相互作用の中に現出した「不確定の中心」として常に行動を指向していると考えられる。西田もやはり身体の機能に注目し、「働くもの」であり、「作られて作るもの」としての根本的能動性を見ているように思われる。またベルクソンは『創造的進化』において、機会論と目的論を乗り越えようと試みているが、この点に関して西田はベルクソンが生命を実体化しすぎる点に批判的だが、同じ問題意識を持っていたといえよう。ベルクソンは心身問題の延長に同時代の物理学にも目を配りながら物質とは何かを考えていたが、この問題は開いたままに残された。西田はベルクソンより積極的に当時の新しい量子論の筆頭、ニールス・ボーアなどに言及している。これらがやはり身体という問題系に深く接していることは問題自体の拡がりに由来するのだろう。

以上のような西田のベルクソンへの不半の中での問題の共有という事態に鑑みて、改めてベルクソンの身体論を内在的に検証し、それが西田哲学批判的に接続される諸要因を考えてみたい。